

2018年度 SPARC Japan セミナーの活動計画について

1. 2018年度の考え方

2018年度の SPARC Japan セミナーは、年間テーマを「オープンサイエンスの定着に向けて」とする。主に欧米に先導されてきたオープンサイエンスを目指した活動は、日本でも理解が深まりつつあることから、この活動を今後どのように定着させていくかについて議論したい。

今年度は以下のとおり4つの企画案を検討した。

- ・ 第1回：この6月に作成される予定の「国立研究開発法人におけるデータポリシー策定のためのガイドライン」を取り上げながら、データ利活用推進のための図書館と研究者の協働のあり方や、図書館の関与の仕方について議論したい。
- ・ 第2回：昨年度のセミナーで議論したコンテンツの質保証及びプレプリントについて、欧州等での取り組みを紹介しつつ、さらに議論する。
- ・ 第3回：JUSTICE が関心表明を行った OA2020 にまつわる主に欧米での最新動向を紹介し、日本における OA 推進のための具体的な活動の可能性を議論したい。
- ・ 第4回：人文社会系分野におけるオープンアクセスの現状を理解し、同分野におけるオープンアクセスの推進可能性を探るとともに、オープン化に必要な識別子に関する知識等を共有する。

また、「アジアの OA」をテーマに、2017年12月に開催された COAR Asia での成果を踏まえ、欧米とは異なるアジア地域ならではの活動を紹介し、日本がイニシアティブを発揮して新たなビジョンを見いだすことを目標とした議論をしたいという案もあり、これについては JPCOAR との共催の可能性も視野に入れて引き続き検討することとした。

2. 企画（案）

日程 (予定)	テーマ(案) 及び 企画 WG メンバーの関心事項	WG 担当 (予定) ◎主査	備考
第1回 9月	<p>○データ利活用とポリシー</p> <p>[データ利活用]</p> <ul style="list-style-type: none"> データの内容については専門家でないといけない点もあるが、データの形式や管理状況については非専門家でもわかる。 どんなに内容が優れたデータであっても、形式がいい加減だったり、適切な管理がなされていないことによって、その価値を落としているデータが存在する。 文献の分類や管理をしている図書館員は品質管理の専門家であるともいえ、データの品質管理にもその専門性を発揮できるのではないか。 実際にデータに触れている方に来ていただいて事例紹介を行い、図書館員には自らの可能性を発見してもらい、研究者にはデータ取得の際に何に配慮すべきか具体的に理解してもらい、実際の協働を促したい。 オープンガバメントの文脈では、図書館サービスにおいて政府標準利用規約を適用することで、レファレンスサービスのオプションが広がる可能性がある。 <p>[データポリシー]</p> <ul style="list-style-type: none"> 総合科学技術・イノベーション会議に設置された「国際的動向を踏まえたオープンサイエンスに関する検討会」にて、「国立研究開発法人におけるデータポリシー策定のためのガイドライン」の策定が行われており、6月には確定する模様である。 研究データ管理・利活用ポリシー策定におけるポイントや、定めるべき項目（目的、定義、制限事項、セキュリティなど）が示されている。 検討会構成員や検討会において事例として発表を行った機関から、本ガイドライン策定の経緯や概要、また事例報告をいただく。 図書館の側では、具体化の過程でコミットすることを念頭に、運用レベルで何ができるかを考えていく必要がある。 	林(JIRCAS)◎ 林(NISTEP) 八塚(NBDC) 石山(一橋大)	候補日： 8/27-29, 9/3-4, 9/6-7, 9/10, 9/18-19, 9/25-28 ・終日の可能性

<p>第2回 10月 (OAWeek, OAサミット 2018)</p>	<p>○クオリティコントロールとプレプリントサーバ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2017年度 SPARC Japan セミナー第2回ではプレプリントサーバ・機関リポジトリでの質の担保が議論され、第3回ではサイエンスの成り立ちとピアレビューの始まりが語られた。掲載コンテンツの質の担保が現在の課題である。 ・学術雑誌が電子化される前から査読のあり方は常に議論されていたが、電子化とオープン化によって、オープンピアレビュー、軽量査読など様々な試みが生まれている。 ・「コンピューターサイエンス等の分野によっては、プレプリントに上げることで自体が主な研究成果公開手段となりつつある中で、どのように評価するかも課題となっている。 ・オープンに公開される情報の質が保証されることで、安心して利活用が進み、オープンサイエンスも進展する。 ・Wellcome Trust Open Research の査読を引き受けている F1000 の方の話題提供を中心に行う。 	<p>林(NISTEP)◎ 八塚(NBDC) 鈴木(NII/CODH) 中原(筑波大) 中村(東京大)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・候補日： 10/24(水), 10/25(木), 10/26(金) ・本年度 OAWeek テーマ “Designing Equitable Foundations for Open Knowledge”, 開催期間 October 22-28 ・終日の可能性
<p>第3回 (11月)</p>	<p>○OAのモデル</p> <ul style="list-style-type: none"> ・JUSTICE は OA2020 への関心表明をしたが、具体的な行動に移るためには、OA2020 とは何かを多くの関係者に知ってもらう必要がある。 ・海外（特にヨーロッパ）におけるより具体的な OA の目標、戦略を参考にする。 ・その上で日本では OA 推進のために何ができるかを考えるための材料を提供する。 	<p>石山(一橋大)◎ 高久(筑波大) 中村(東京大) 林(JIRCAS)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・海外招聘可(1~2名想定) ・終日の可能性
<p>第4回 (1月~2月)</p>	<p>○人文社会系, DOI, 紀要 [人文社会系]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2018年5月に日本出版学会で学術出版のオープン化についてのワークショップを行った経験からの提案。 ・狭義の人文学(歴史学・哲学・文学など)に関しては方向が見えない以前の段階で、多くの研究者は理解していない。OAへの理解が進んでいない層へのリーチを試みたい。 ・SPARC Japan 第5期基本方針「③オープンサイエン 	<p>鈴木(NII/CODH)◎ 高久(筑波大) 中村(東京大) 中原(筑波大) 林(NISTEP)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・デジタルアーカイブ学会やじんもんこんとの共催も検討する。 ・終日の可能性

	<p>スへの活動スコープの拡大」にも、人文科学・社会科学分野の動向等に関する情報提供、とある。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2013年8月に開催された「人文系オープンアクセスの現在」から5年が経っているため、その変化の確認を行う。 ・人文社会系ではジャーナルよりもモノグラフに重きを置いている。図書の機関リポジトリへの掲載も行われている。 ・商用電子書籍はサービスが終了すると利用できなくなるリスクがある。オープンなプラットフォームを用意する必要がある。 ・出版側の視点と利用側の視点の双方から議論が可能 <p>[DOI]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特に人社系への啓発の意味もこめて、再度、入門レベルの概説と最近の動向まで解説されるとよいのではないか。 ・DOI以外のPIDに対して、長所短所含めて考えることでDOIの理解を深める。 <p>[紀要]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大学がサポートしていない研究所、自治体、博物館の公開について、機関リポジトリへの掲載の状況と可能性を考える。 ・芸術系の論文には図版が多用されており、著作権や所有権の問題がある。 		
	<p>○アジアのOA</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本がオープンアクセス（オープンサイエンス）先進地域である欧米を迫る状態になっているが、同じアジア地域のオープンアクセス（オープンサイエンス）の状況についてはよく知られていない。 ・2017年12月に開催されたCOAR Asiaでは、共通の課題、各国特有の取り組みが紹介され、JPCOARのトレーニングツールは注目を集めた。 ・同じアジア地域の国々の状況の情報提供を行うことで、アジアに適したオープンアクセス（オープンサイエンス）の新たなビジョンを模索する場とする。 	<p>中原(筑波大)◎ 八塚(NBDC) 鈴木(NII/CODH) 林(NISTEP)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・JPCOARとの共催可能性についても検討する。